プレーヤー兼レフリー

鈴木　澄代
SUZUKI　Sumiyo
エクシオグループ㈱
NTT事業本部NTT営業本部
営業推進部門

趣味が多すぎて……

小学3年生から始めたスキー，中学から始めたバスケットボール，社会人になって始めたゴルフ，ママ友に誘われて始めた登山。

その中でも一番熱をいれているのがバスケットボール。

就職で上京するとき，生活用品以外に段ボールに詰めたのがバスケットボールシューズだった。職場の先輩に，バスケットボールチームを探して欲しいとお願いして，当時携わっていたプロジェクトのお客様のチームを紹介してもらった。練習は平日の夜で，大きなスポーツバッグを持って出勤した。練習後の1杯は，チームみんなの楽しみであり，よくバスケ議論をしたこと思い出す。

年に1度開催される，お客様主催の支店別（事業所別）対抗の全国大会に出場するために合宿もし，夜はBBQで大騒ぎ。翌日の練習はみんなが二日酔いでコートに立っているほど，バスケットボールもお酒も愛する仲間達だった。

その後引っ越してチームを離れることになったが，プレーの楽しさを忘れられずネットで探した。昔のようにガツガツできないため現在はママさんチームで時々プレーする程度。

ママさんバレーはメジャーなのに，ママさんバスケを知っている人はとても少ない。しかし，意外と歴史は古く，1978年に埼玉県家庭婦人バスケットボール連盟が発足し，その後41県で家庭婦人バスケットボール連盟が存在するほど知る人ぞ知る組織である。41歳以下の一般・42歳以上のシニア・50歳以上のゴールデンシニアの3つのカテゴリに分かれており，全国大会を目指した県大会も開催されるほど，活動は盛んだった。

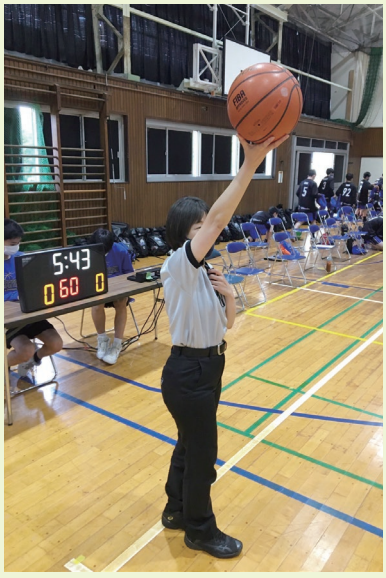
試合前の打ち合わせ（筆者左）

現在，バスケットボール界の組織変更があり，家庭婦人バスケットボール連盟は存在しないが，各チームは存続し，活動は健在。

ママさんバスケはとにかく激しい。体格もいいし，子育て中の肝っ玉母さんが多く口も悪い。「ファールじゃん!!」「押すなよっ!!」「イッテーよ!!」，コートの上ではケンカ腰だがその激しさも，またいい。

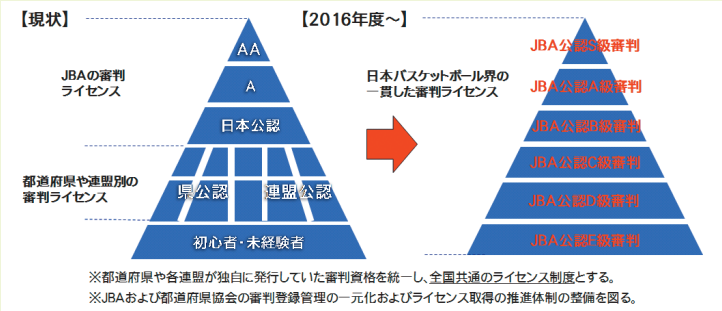
ところが，そんな風に楽しんできたバスケであったが，連盟の試合に参加する為にはチームから帯同審判を出さなければいけなくなった。比較的育児に手がかからない私がターゲットとなり，チームのためだと仕方なく引き受けた。これがプレーヤー兼レフリーの始まりとなった。

バスケットの審判ライセンスはE級～S級まで6階級あり，E・D級は地区大会，C級は県大会，B級はブロック大会，A級は全国大会，S級はプロリーグを担当することができる。



試合中レフリーとしてプレイを促す筆者

ほとんどの人は，ライセンスを上げるため



審判新ライセンス制度（2016年改定）の全体像
(公財)日本バスケットボール協会Webサイトから引用（一部加工）

我がチームのユニフォーム

に，週末は中高大の練習試合や公式戦，市民大会等を吹きに行き技術を習得する。ある程度技術が上がったら昇級試験（実技・筆記）を受けるが，B級審査以上は連盟の推薦が必要であるため特に必死なアピールが必要となる。審判には2人制（2PO）と3人制（3PO）があり，B級審査以下は2人制となるため，2人でいかに協力した判定ができるか話し合いながら修正していく活動になる。2人で10人の選手を走りながらジャッジすることは，観ているより難しく，始めた当初は全く笛を鳴らすことができなかった。ルールも細かく，タイマーも0.1秒単位で管理するため頭の中と体がバラバラになることは多々あった。

選手のスピードや技術についていけないこともあり，選手やコーチ，先輩審判から怒られることも多く凹んでばかりだった。市民大会では選手にボールを投げつけられることもあった。馬鹿にされたり，失笑されたりは毎度のことであったが，不思議とそんなことがあっても辞めようとは思わなかった。逆に悔しくて私を奮い立たせることになった。これをアスリート魂というのであろうか。とにかく意地になって毎週笛を吹いた。怒られることがわかっていても，依頼があれば吹きに行った。カテゴリ（U15，U18，社会人）にもこだわらずチャレンジした。おかげで，未熟ではあるが目標とするライセンスを取得することもできた。ライセンスの重みはついてくるが，とにかく嬉しかった。

審判員となって，プレーヤーとは違う視点でバスケットボール観ることで，よりバスケットボールの楽しさを知ることができた。

最近では，Bリーグがメジャーになり，海外で活躍する日本人選手が増えた。2020東京オリンピックでの女子バスケは，小さな日本人が世界の舞台で銀メダルを獲得したことでこれからの子供達に夢と希望を与えたことであろう。私の購入したバスケット観戦チケットは夢で終わったが……（余談ですが）

長く活動をしていると，中学生だった生徒が高校生となり「中学時代吹いてもらいました」と声をかけてくれる子，社会人となった元高校生が市民大会に登場し挨拶しにきてくれたりと嬉しいこともある。市民大会の常連さんとは冗談を交えた会話もするし，審判活動は出会いの場でもあった。もちろん審判仲間との出会いもとても貴重で，たまには内緒のことを愚痴らせてもらったりも……

審判員になる前，かつては私もジャッジに不満を漏らすプレーヤーであった。審判の大変さを知ってから，プレー中は純粋にバスケットボールを楽しむことだけに集中しようと思った。

最後に，コロナ禍の活動について。

コロナ禍に入学した学生が引退を迎える時期となった。緊急事態宣言・まん延防止等重点措置により数々の大会の中止や対外試合の自粛を強いられてきた。選手として技術を上げる時間もままならず引退を迎えることになる。先日，引退する3年生の保護者だけ観戦することが許された公式戦（引退試合）を担当した。私にとっても久しぶりの有観客試合だった。保護者の声援や拍手に選手の気分は乗っている。この盛り上がりを下手なジャッジで壊しちゃいけない。審判のジャッジも色々な確度から見られている（汗）

そして，見られている緊張の中試合は終わった。

（審判によって試合は壊されなかったかな？）

（やり切ったと言える最後になったかな？）

誰が見ても納得のいくジャッジができるよう，私の審判修行はこれからも続く。